

浪江町幾世橋地区で 「防災まちあるき」実施

福島大行政政策学類西田ゼミ

福島大学行政政策学類の西田奈保子准教授のゼミは、「行政と災害とまちづくり」を研究テーマとして、これまで伊達市霊山町山野川北部行政区で防災まち歩きや防災マップ作成、住民ワークショップを通して同地区の防災計画策定に関わってきました。

9月には浪江町と地域未来デザインセンター主催の幾世橋地区での「防災まちあるき」にも協力、参加者と学生と一緒に地域内の危険箇所などを見て回り、地図上に落とし込むワークショップを実施しました。この取り組みは、住民の防災意識向上を図り、自分たちの経験を次世代に伝えていくという意欲につながりました。西田准教授は今後について「住民や町の意向に基づき、防災について住民がより当事者として主体的に動けるよう協力していきたい」と語っています。



▶ まち歩きの様子



▶ 2023年度西田ゼミのメンバー

相双地域支援サテライトの活動

教育環境整備



▶ ラダートレーニング



▶ 準備運動はしっかりと

地域復興支援



▶ 佐藤さんによる講演



▶ 参加者同士の意見交換

なみえ創成
小学校

福島大陸上競技部が 競技指導

双葉郡内のほとんどの小・中学校ではスクールバスによる登下校を行っています。今回、子どもたちの運動不足や体力低下の課題解消のため、浪江町のなみえ創成小学校から体育の授業と連動した「陸上競技指導」を依頼されました。先生となるのは福島大学陸上競技部顧問の蓮沼哲哉准教授と学生の皆さんです。子どもたちは同小グラウンドで「ハードル走」「走り幅跳び」を間近で見学した後、「速く走る」トレーニングに挑戦しました。普段しない動きに「ムリ～」「分からない!」と口にしながらも、笑顔で体を動かしていました。

サテライトではこれからも教育現場のニーズに沿った支援を続けてまいります。

福祉とまちづくり 研修ワークショップ開催

被災12市町村では福祉や帰還・移住・定住が大きな課題としてあります。このたび、富岡町の要望により千葉県旭市で福祉の観点から魅力あるまちづくりを実践している楽天堂の佐藤伸一さんを講師に、研修ワークショップを同町のトータルサポートセンターとみおかで開催しました。自治体職員、まちづくりや福祉関連職員など11人が参加しました。

福島県出身の佐藤さんは震災後に高齢避難者を介護した実体験などを交え、高齢者に寄り添う介護がいかにによりよいまちづくりへとつながってゆくかについて講演。その後、参加者同士で意見交換を行い、「福祉への考え方が変わった」「浜通りのまちづくりの参考にしたい」など、前向きな声が聞かれました。

お知らせ 被災12市町村の 今を伝えるパネル展 — 東京と福島、岩手で

相双地域支援サテライトは来年2、3月、原発事故で避難区域が設定された12市町村で生きる帰還住民や移住者の日常を紹介するパネル展「『被災地』福島十二人の12年」を東京都と福島県、岩手県の3会場で開催します。



▶ 前回のパネル展より

東京

2月3～9日、隅田公園リバーサイドギャラリー(台東区)

福島

2月16～22日、福島大附属図書館(福島市)

岩手

3月2～11日、大館町文化交流センターおしゃっち

福島大学
地域未来
デザインセンター

相双地域支援
サテライト

相双の風

Vol.
36

2023年秋号

「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。



TOPICS | トピックス

震災学習の取り組み発表 — 檜葉小の3人 「ぼうさいこくたい」で —

横浜市の横浜国立大学で9月17、18日に開催された日本最大級の防災イベント「ぼうさいこくたい2023」に、福島大学地域未来デザインセンターが出展しました。この中で、檜葉小学校6年生の猪狩隆斗さん(12)、松本悠大さん(12)、馬上昊太さん(11)の3人と、福島大学災害ボランティアセンターの学生3人が、檜葉町で今年3月に実施した震災学習と防災の取り組みを発表しました。

小学生3人は、震災後に避難先で生まれています。直接は体験していない震災について学んだことを、自分たちの言葉で生き生きと、延べ250人の来場者に説明しました。

発表を準備した檜葉町地域学校協働センター長の猿渡智衛さん(43)は「この企画で、子どもたちは知らない人と関わる楽しさを知り、著しく成長した。来場者からも『立派だった』『言葉に胸打たれた』など、被災地を哀れむものではなく、たくましく生きる子どもたちの姿に対するコメントをもらえ、充実した機会となった」と感想を述べました。



インターンシップから広がる 学生・企業・地域の協働

被災12市町村では、そこに立地する事業所と地域の魅力を学生に知ってもらうためのインターンシップの取り組みが活発になってきています。富岡町と広野町の事例を紹介します。



地域と参加学生に 「とみおかプラス」な2週間

富岡町地域協働型学生インターンシップ

富岡町では8月28日～9月8日、町役場と一般社団法人とみおかプラス、福島大学が協働し、「富岡町地域協働型学生インターンシップ 2023夏」を実施しました。

これまで、大学生の考えや視点から、まちづくりにとって重要な気づきを得ることが多く、インターンシップ・プログラムも、学生が受け身で「やらされている」ことにならず、主体となって取り組むことのできるものを目指しました。

プログラムは、今年2月開催の日帰りプレ企画と、5月開催の考案合宿に参加した学生の案を参考にして策定し、6人が参加し、町内の3事業所で受け入れました。

学生からの成果報告では「わくわく」「つながる」というキーワードが共通していました。ここから、効果や実現性を第一にするのではなく、心に正直になって事業展開することの大切さを改めて感じました。また「富岡町に通うことで刺激を受け、大学生活でも積極的になれた。富岡町に救われた」といった学生がいました。富岡町と関わることで、参加者の人生や生活にプラスの効果がある、まさに「とみおかプラス」なプログラムを今後も提供していくため、取り組みの周知や、受け入れ企業の拡充を図っていきます。



▶ インターンシップ参加学生



富岡町企画課主事
畠山 侑也さん

町全体で受け入れ、みんなで育つ1カ月

広野町地域実践型インターンシップ・プログラム



広野町では、昨年度から町内に1カ月滞在し活動する「地域実践型インターンシップ・プログラム」を始め、今夏も3企業が9人のインターンを受け入れました。そのうち2社に取材しました。

「三方よし」のプロジェクト

「ちゃのま」では交流スペースの運営などを行っています。これまで数回、独自にインターンを受け入れ、今年度は正式に町のプログラムに即して実施しました。

信頼して任せられることも大切な一方、放任すると学生も戸惑います。インターンと共に走り、モチベーションを上げる姿勢が必要ですね。学生は町に新鮮な空気を送り、地域にも変化をもたらすので、ぜひ他の企業も受け入れてほしいです。学生には、大人との交流を通して、自分の人生を豊かにしてほしいです。

インターンシップは学生・地域・企業の3者が“Win-Win-Win”となる「三方よし」のプロジェクトだと実感しています。



合同会社ちゃのまプロジェクト代表
青木 裕介さん

受け入れ事業所と参加学生の声



受け入れ事業所

富岡町観光協会
主任
猪狩 幸子さん

▶ 「さくらモール」でのアンケート

2週間は長いようで、あっという間でした。学生が「さくらモール」で集めてくれたアンケートからは、観光協会が開発してきた特産品が、町の人に知られていないことを痛感しました。レンタサイクルの利用者向けの新たなコースを、Googleマップで提供するなど、私たちが思いつかないようなアイデアを頂いたので、ぜひ実現していきたいと思っています。



受け入れ事業所

宮田運輸
支援部企画開発室長
建野 成恒さん

▶ 宮田運輸でインターン生と話す建野さん

若い学生の純粋さに感心しました。実現できるか、採算が取れるかということ以前の「何のために事業をやるのか」という点で、受け入れた学生は悩みながらも、「地域の人に喜ばれること」という軸をぶらすことなく、課題に取り組んでくれました。若い社員も、やりたいことにチャレンジして成長する学生から刺激を受けていました。

受け入れ事業所

とみおかワインドメニュー
統括リーダー 細川 順一郎さん

インターン生は最初は戸惑っていましたが、だんだん様子が分かってきて「ワインによるまちづくり」というコンセプトを理解してもらえたと思います。ワインづくりは一代では終わらず、後継者の獲得と育成が課題ですが、そこも理解して、関わってくれる人を増やす知恵を出してくれました。思いを伝えるため、今後も若い世代を受け入れたいです。

参加学生

福島大学食農学類1年
天野 陽菜子さん



▶ ブドウを収穫する天野さん

大学の授業で、浜通りでは新しい取り組みをしていると聞き、チラシで見た「とみおかワインドメニュー」を知りたいと思ってインターンに参加しました。富岡に愛のある人や、熱量のある人との出会い、他のインターン生との出会いが刺激的でした。やり切れなかった部分もあり、また富岡町に行きたいです。



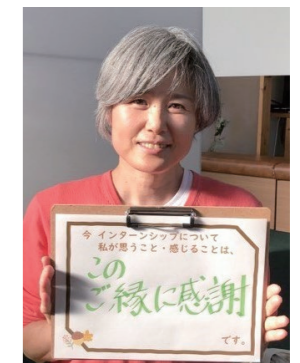
福島大学公式マスコット
キャラクター
めぼえちゃん

「みんなで育つ」という「まちづくり」

柏屋は、明治18(1885)年から屋号が続く定食屋です。常連客に勤められ、今年3月に開催されたインターン報告会に参加して、そこで学生の力に魅了され、今回、初めて学生を受け入れました。

受け入れには、企業も役場も真剣になることが必要で、「町全体で受け入れる」という横の連携も必要です。そこから、学生だけではなく企業や役場も「みんなで育つ」という「まちづくり」になると思います。細々と138年続けてきた家業だからこそ、地域の皆さんと成長していきたいという思いが強くなりました。今後の自分の事業の取り組み方を再考するきっかけになりました。

学生たちと同じ空間で長い時間を過ごし考えをぶつけ合い、一つのことに向かって同じ目線で本気で取り組んだからこそ、尊い夏になりました。このご縁に感謝です。



有限会社柏屋 取締役
木村 久美さん